

髪の毛がない人びとの「生きづらさ」とジェンダー

—脱毛症当事者への聞き取り調査を通して—

日本大学大学院 吉村さやか

1. 目的

本報告の目的は、髪の毛がない人びとの「生きづらさ」にジェンダー差はあるのか、あるとすればそれは具体的にどのような差なのかを明らかにすることである。既存研究では、髪の毛は女性性や女性美の象徴であり、「髪の毛がないこと」は男性よりも女性の場合のほうがはるかに深刻な問題になるといわれてきた（Synnott 1993=1997; 須長 1999）。しかしこれまで、とりわけ女性に髪の毛がないことは、当事者にとっても調査者にとっても語りづらく聞きづらい経験としてタブー視されてきた。そのため、既存研究でもジェンダーの比較検討は行われておらず、どのようなジェンダー差があるのかは明らかにされてこなかった。

2. 方法

報告者は2012年8月から2018年4月にかけて、脱毛症の男女70名（男性30名、女性40名）に対して生活史の聞き取り調査を行い、得られたデータをもとに「生きづらさ」のジェンダー比較を行った。彼／彼女たちは、生まれつき髪の毛が生えてこない（先天性脱毛症）、あるいはある日突然始まった脱毛によって髪の毛を失い（円形脱毛症）、まだら頭やスキンヘッドになったという経験をもつ。調査協力者の年齢は10代から60代で、発症年齢はさまざまだった。分析では、脱毛症の男女それぞれの「生きづらさ」を網羅的に把握することを目的に、調査データを横断的に用いながら比較検討した。

3. 結果

調査の結果、彼／彼女たちは、発症後、「ふつうの身体ではない」ことによる「否定的な自己認知」という問題に直面していた（＝「生きづらさ1」）。それを軽減／解消させるために、当事者の多くは「髪の毛がないこと」を不可視化（＝パッシング）していたのだが、その過程で、精神的苦痛、身体的苦痛、経済的負担、活動制約などの新たな問題が生じており、さらなる対処に迫られていた（＝「生きづらさ2」）。ジェンダー差が確認されたのは「生きづらさ2」であり、さらにそれは、社会／他者によってだけでなく、本人自身によっても、「ふつうの男性／女性」として生きるうえでの「あたりまえ」と意味付けられることで、軽減されていることが明らかとなった。

4. 結論

以上から、脱毛症で髪の毛がない人びとの「生きづらさ」には、「髪の毛がないこと」それ自体によるものと、それへの対処の過程で生じるものとのふたつがあり、前者にジェンダー差はない。対して後者は、ジェンダーの文脈で捉えられやすいことによって、個人的に対処すべき問題とされ、社会問題（＝クレイム申し立て）としては成立しづらい現状がある。

文献

須長史生, 1999, 『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』勁草書房.

Synnott, A., 1993, *The Body Social: Symbolism, Self and Society*, New York, Routledge. (= 1997, 高橋勇夫訳『ボディ・ソシアル——身体と感覚の社会学』筑摩書房.)